

菊池毅彦氏 インタビュー

第1部 姉妹オリンピック出場の父親として 菊池家の父親として

第2部 南相木村村長として 村の魅力、村の紹介

日時 2014年10月28日（火） 13時～14時30分

場所 長野県南佐久郡南相木村 3525番地1
南相木村役場 一階会議室

東経緯度 東経138度33分01秒 北緯36度01分57秒

インタビュー 南相木村村長 菊池毅彦氏

インタビュー 信州豊南短期大学 言語コミュニケーション学科
田村愛・笠井真由・北澤美月・本田沙椰翔



・ YouTube インタビュー動画

URL : <http://youtu.be/tocetG1krLs>

検索ワード : 「南相木村」「スケート」「オリンピック」「豊南短大」「菊池毅彦

質問者 ※以下 (質) とします。

菊池毅彦氏 ※以下 (菊) とします。

(質) では、これから質問の方に入らせて頂きます。まず最初にご自身とご家族の紹介をよろしく願います。

(菊) 私の名前は菊池毅彦と言います。年齢は58歳です。南相木村で生まれて、19歳から22歳までは東京に4年間行っており、また南相木村に帰って来ました。ほとんど南相木村が住処ということです。家族は、84歳の母と妻と娘が5人です。

(質) 次女の彩花さんと四女の萌水さんがソチオリンピックに出場されたのですよね。

(菊) はい。

(質) どのような娘さんたちですか？

(菊) やはり、一つのことについて一生懸命頑張る子供達だと思います。

途中でスケート以外にも、水泳をやったり、バレーボールもやったりという経験もありましたが、小さい頃からスケートをずっと続けてきて、その成果が、やっとなオリンピックという^{ひのきぶたい}檜舞台に、結ばれたというか、花開いたということだと思います。ただ、日本の代表になるということは、本当に難しい事です。

私は親の立場なのですが、一番は、やはり子どもたちがどれだけ努力しているのかという事だと思います。たぶん、私たち親には見えないような厳しい練習もしたり、陰で泣いたり笑ったりっていうことがきっとあるんじゃないかなと思っています。

今もまだ全員が現役の選手なので、そういったところはまだ、私たちには話はしてくれませんが、たぶん現役を引退した時にはそんな話も聞かせてもらえるのではないかなと思っています。

(質) 現在も娘さんたちはスケートをしています、どのような理由でスケートを始めたのでしょうか。

(菊) 南相木村や辰野町でもそうだと思うのですが、小さい子供たちの取り組むスポーツはたくさんあると思うのです。色んな種類のスポーツがあると思うのですが、南相木村の場合には、児童数も少ないということから、最初のうちは男子は少年野球、女子はバレーボールをしています。そして、冬は他に何かをやる事ができないのでスケートをしています。だいたいその三種類くらいのスポーツを子供たちはやってきたのですが、今は少年サッカーに行くなど、時代の流れで色んなスポーツが選べるようになってきました。

なので、お父さんやお母さんたちが隣町へ練習に連れて行ったり、近くの市のチームに所属をさせてもらったりして一生懸命頑張っているようです。

私の家族の場合、当時、冬はスケートしかなかったので、スケートをしていました。

今はもう使われていませんが、役場から2kmくらい上流に立岩湖^{たていわこ}という人造のダムがあり、そのダムの水が冬は凍るのでそこで練習を始めたことがきっかけです。

（質）娘さんたちがスケートに初めて触れたのは何歳のことですか？

（菊）一番上の子は、小学校に上がる前なので、四歳か五歳くらいだと思います。上の姉たちがやっているのを見て、妹たちはその影響を受けていきました。そのため、下の子どもたちが始めたのは、三歳くらいからです。

（質）娘さんたちは小さいころから体を動かす事は好きだったのですか？

（菊）そうだと思います。動かす事が好きというか、小さいうちから走り回っていました。家の中や庭に出ても、保育園に行っても…そういう意味では体を動かす事は好きだったのではないかな。
（頷く）

（質）娘さんたちがオリンピックを目指すようになったきっかけを教えてくださいたいのですが。

（菊）私の場合は本人ではないので分かりませんが…たぶん高校生くらいからだと思います。中学生くらいまでは、そんなこと夢にも思っていなかったと思うのです。やはり高校生くらいになると、ショートトラックもロングトラックも全日本クラスの選手の皆さんと一緒に滑る機会がかなり多くなります。その中でやはり、将来はこういう風になれたらいいなというような、夢を持ったのではないかなと思います。

（質）娘さんたちは普段、どのような練習をしているのでしょうか。

（菊）私は小学生くらいまでしか関わらなかったのですが、中学校以上になると、それぞれクラブ活動の専門の先生方がいらっしゃいます。中学校、高校、それから大学や企業、そういうところにそれぞれその専門のコーチがいらっしゃるので、そういう皆さん方が技術的指導をしてくれます。なので、私たちはもう全然ノータッチなのです。

小学生のころは、南相木の小学校でもスケートクラブというものがあり、そのクラブに所属していました。

それ以外にも、土曜日や日曜日、それから平日でも、スケートの練習のない日にもスケートリンクに連れて行って、練習をさせたりしました。その時には、リンクサイドで見えて「ああした方がいいよ」「こうした方がいいよ」というような、ある意味技術的な指導も含めて教えていました。

（質）娘さんたちは普段、一日に何時間、一週間に何日間くらい練習していたのでしょうか？

（菊）まだ今も現役選手なので、今の練習時間というのは、ちょっと私にはわかりません…。

（質）わかる範囲で教えていただけませんか？

（菊）小学校時代の場合、普段はやはり授業や学校があるので、夕方の5時半から6時頃に始めて、6時ぐらいから7時半くらいまでの一時間半くらい練習をしていましたね。その一時間半の中でずっと滑っていると体力が持ちませんし、子供の身体のこととも考えなくてはなりませんから、正味一時間というものですかね。

（質）夏場は、スケートのリンクが外では作れないと思うのですが、夏場は娘さんたちはどのようなトレーニングをしていたのでしょうか？

（菊）これも小学校の時の話になりますが、夏場は何もやっていません。普段の生活通りです。

（質）特に何か特別なことはやっていなかったのですか？

（菊）上の二人は、特別なことはしていませんでした。

3番目からは、この隣村の南牧村に帝産アイススケートリンクがあり、そこのクラブチームに所属をして、5月のゴールデンウィーク明けから練習していました。最初の頃は週三回くらいの練習をしていたのですが、上手になってくるにつれて、練習が毎日という形に変わっていきました。冬になると日曜日は大会があり、月曜日が休みになるので、週五日練習をし、一日が大会、一日が休みという感じでした。

（質）南相木村には小学校しかないそうなのですが、中学、高校となると近隣の市や町に通っていたと思うのですが、娘さんたちの学業と練習の両立というのはどのようにされていたのでしょうか？

（菊）スポーツ関係のサークルに入ると、練習もきつく、身体も当然疲れてきます。中学校に行くと、スケートに限らず、いろんな部活がありますよね。娘はバスケットをやりたいということだったので、中学の時は女子バスケット部に入っていました。そして、部活でバスケットをやって、冬はスケートもやっていましたが、当然授業もあり、中間テストや期末テストもありますよね。

全てが全てではないですが、そういう中でテストの点が低いということは勉強をしていないということに繋がるので「とにかく勉強もちゃんとやってくれ」と言いました。「自分たちが選んだことなのだから、それは最後までちゃんとやり通すように」ということで、時には色んなことがあって、叱咤激励もしました。だけれども「自分が選んだ道じゃないか、そこで屈していたら、もうこれからの人生は絶対そういうことになる。何をやるにしてもみんな逃げてっちゃうよ。だから、どんなつらいことがあってもちゃんとやり通せ」ということを、私の方からも妻の方からも、話してあります。

（質）自己責任…という形だったのですか？

（菊）自己責任という表現はあんまり適当じゃないと思うのですが…。

責任につながる事ではなくても、やはり、自分で決めたことは最後までやってほしい。一つの目標を

持ったら、それを最後までやり通す。

何かをやり通そうとした時、そこにいろんな壁がありますよね。その壁を乗り越えないと駄目だし、その壁から一度でも逃げたらもう、いろんなところに行っても、絶対に壁があったらまた逃げる、壁があったら逃げる、そういう人生しか送れない人間にはなってほしくない。だから、どんな壁があっても乗り越えてもらいたい。それが、基本です。

（質）お父様として、子育てで大変だったこと、嬉しかったこと、つらかったことなどが何かありましたら…。

（菊）まだ今も子育て中みたいなものなので、あまり嬉しかったことというのは思い当たらないのですが…。とにかく、自分自身も含めて、自分に厳しく生きようということです。自分に甘えて生きていたら、絶対に上手くいかない。

子どもたちが小さい時には、やっちゃいけないことをした時には、それなりにげんこつもくれました。今でいう体罰になるかもしれませんが、やはり、“こういう悪いことをしたら、こういう痛みが伴うのだな”ということは、理論だけじゃ分からないものです。経験して初めて分かる世界なので、そういうことも大事なことです。例えば、小さい頃はお箸が上手く使えないですよね？そういうお箸なども早く上手に使えるようにという、訓練ではないですが、そういうこともしました。

人間というのは、上手く掴めないから手で食べてしまいますよね？それは絶対に認めませんでした。だから、手で食べた時には手をつねるなどもしました。そうするとやはり、子供なので泣きます。でも、自分が何とかしなくちゃいけないという気持ちがきつと子ども心にあったのだろーと思います。だから割と早いうちにお箸は使えるようになりました。だた、“なんでつねられたのか”ということをお子に教えないと、子供達は“手で食べたならつねられる”というだけの話で終わってしまいます。だから、何でつねられたのか、何で痛い思いをしなくちゃいけなかったのか、ということをお、親として3歳なり4歳の子供達に教えてあげる。それをするのが親子だと、私は思います。当時、人間の脳は5歳ぐらいには完全に形成されると言われていたのですが、今はだいぶいろんな研究が進んできて、3歳で8割から9割が形成されることが分かっているそうです。

だから、脳が形成される前にある程度のことを教え込んでおかないと、親として駄目なのです。なので、私は出来るだけ徹底して教え込むようにしました。

中学生になってからは、あまりいろいろ言わないようにしました。小学校の頃はうるさかったですよ。

（領き）^{いっきょしゅいっとうそく}一挙手一投足全部チェックしていました。けれど、中学校に行ったらある程度自立の芽も芽生えてきますし、青春期にもなってくるので、あとはいろいろ言いませんでした。でも、言わなくても、悪いことと良いことの区別はちゃんと本人たちもできていました。そして、嫌なことや駄目なことは友達にもはっきり駄目と言っていました。けれど、友達との付き合いというのは大事にする、そういう子供達でしたよ。

（質）先ほどお箸のお話ですとか、ご家庭内の教育のお話が出たのですが、奥様との教育方針は同じでしたか？

（菊）私個人的には、教育方針が共有できているかできていないかというスタンスはおかしいと思うの

です。夫婦というのは他人と一緒にいることですよね。その中で子育てについて、お父さんかお母さんのどちらかが必ず主導権を握るはずなのです。だから、子育てや子どもの教育に対して、共有しなければなりません。だから合わないという事は絶対にありえない。なぜなら、自分達が子孫を残すためにつくった子供ですし、その子供たちにこれから先も一所懸命生きてもらいたいという気持ちでいる以上は、やはりその子ども達の面倒を見なくてははいけません。

私の家の場合、基本的には私の考え方で通してきて、そこへ妻がついてくるという形なのです。ですが、時には教育に関しても考え方の相違があって、夫婦間で言い争いがあるわけです。そういう時には、私も、折れるという表現はあまり適切ではないかもしれませんが、こちらも引いたりします。

そういう関係は常に保っていかないと駄目です。それに子どもに対して両親^{りょうおや}がドーンと怒ったら、子どもも潰れてしまいます。

だから、私が怒ったら必ず陰で妻がフォローしてあげる。そして、妻が怒っている時には、私が陰でフォローしてあげる。

どちらかがフォローをせずに怒ったままにしていると、子ども達は嫌で嫌で仕方がなくなってしまう。それこそ生きていても仕方がないみたいに。だからそういうところは、子育てをする上で、親としてもちゃんと自信をもってやっていかなくてははいけないなと思います。特にこれからの若いお父さんやお母さんには、是非そういう関係を保ってもらいたいなと思います。

…なんて偉そうなこと言いますけれども。そう私は思いますね。

(質) 次にスケートに関連したことになるのですけれども、スケートを通して娘さん方に伝えたかったことというのは何かありましたか？

(菊) さっきも話しましたが、スケートを通してということではなく、たまたまスケートしかなかったというだけなので、それはないのです。

ただ私は、スケートに限らず、いろんなスポーツでもなんでもいいのですが、やる以上はそこから何か得てもらいたいと思っています。「たとえば何が得られるの？」と言ったら、その種類・種目のスポーツが上手くなるだけの話ではなくて、それ以外に、友達とのつながりや礼儀、それから先輩・後輩の世界や言葉遣いなどをすごく学べると思うのです。先輩から「だれだれちゃん駄目じゃないの？」と怒られたときに、我慢もしなくてはいけないこともあるでしょうし、もう言われないうにしないではいけない。だから一生懸命頑張ろうという気持ちも生まれるだろうと思うのです。そういうところがどんなスポーツでも、一番大事なところではないかなと私は思います。(頷き)

スポーツに限らず、サークル活動などでもそうだと思うのですが、先輩後輩というのは必ずいます。社会というのは平^{たい}らくでは生きていけない。それぞれの企業でも平^{たい}らくやっているところはまずないと思います。(頷き) 何年もやってきている年配の皆さんと、新人の皆さんとでは当然開きがあるし、そういう関係性の中で世の中はつくられています。

今のスポーツの中で色々な経験をすることによって、子ども達が社会に出た時も、スッと入れることに繋がる。(頷き)

例えば、皆さんが就職されても、最初のうちは自分自身が緊張しているから、一生懸命あいさつもしたり何したりと気を遣うと思うのです。しかし人間の性格がいろいろと出てくるのは、慣れてきたとき

なのです。人間は大体1年すると慣れてきます。その頃に性格がいろいろと出てくる。その性格が出てきた時、壁にぶち当たってしまったけれど誰も話を聞いてくれないとなると、こもってしまう。これが、今の若い人たちに多いことなのです。

そうならないように小さいころから我慢することを経験していかないと、大人になって、すごく大変なことになる可能性は高いと私は思っています。

（質）では、先ほどのお話の中にいろいろとあったのですが、家族内での決まり事とか特にこうしたほうがいいとか、あるいはしてはいけないなどのしつけや決まり事というのは何か…

（菊）あまり細かい決まりごとは無いのですが、小学生の間、我が家にゲームは一切ありませんでした。子供たちにゲームは買ってあげませんでした。（頷き）

（質）ゲーム禁止…

（菊）はい。

我が家では小学生の間、一切ゲームはダメでした。中学校へ行っても私はゲーム機を買ってあげませんでした。

だから、家でゲームはやっていませんでしたが、知らない間にちゃんとゲーム機が扱えるということは、たぶんどこかでやっているのでしょう。それも、生きていくうえでの子ども達の知恵だと思うのです。親から許可されたことしかできない子ではなくて、親から隠れて友達とゲームができる。

それは友達との付き合いの関係だと思うのです。友達と付き合うためにはやはりこういうことも覚えなくてははいけない。だからそのようなことが自然と身についたのでしょう。（頷き）そういうものは教えて身につくものではなくて、いわゆる“知恵”というものです。うちの子の場合には、そういう知恵が働いたというか、できてきたのだと思います。

（質）では、現在、娘さんたちはそれぞれ大学や事業団に入ってスケートをされていますが、先ほど、女子バスケットやバレーボールのお話が出たのですが、スケート以外の将来を考えていたとか将来の進路決定の相談とかは何か家庭内でありましたか？

（菊）うちの子供達の場合は、ほとんどスポーツがメインになってしまうのですが、長女は中学校でスケートをやめて「私はバスケットをやりたい」というので、佐久地区の中でもいわゆる名門に近い学校にバスケットをやるために入学しました。二番目から下は、スケートだけです。（頷き）

もう本当に小さいうちからスケートをやってきたので、あまり相談というのはないのですが、「こういう事をやりたい」というのは、あるにはありました。それは別にかまわないのです。ですが、チャンピオンシップ…要するに1位を狙って競うこと。それと、みんなで楽しく仲良くやりましょうみたいな、いわゆる大学のサークル的な、社会体育というのは、おそらくうちの子ども達には合わない。飽きが来ってしまうというか、物足りなさを感じてしまうと思います。「チャンピオンシップを目指してやる以上は、そういう社会体育的なところには入らない方がいいよ」というアドバイスはしたことがあります。（頷き）最終的に子供たちはそういうところへは所属しないで、今の道に進みました。

（質）では、ご家族以外の方で、娘さん方に支援をしてくださった方・応援してくださった方はどなたかいらっしゃいますか？

（菊）今回のソチオリンピックに行った時は、本当に村民の皆さん全員が応援してくれていたと思います。（頷き）全国放送で少し我が家も取り上げられたということもあり、“南相木村”の知名度が上がってきたわけなのですが、その時に、「おい今南相木村が出ているぞ」と親戚の皆さん方が、それぞれの南相木村の実家に電話をしたということがありました。（頷き）そういう意味では日本全国の中で、特に南相木に関係のある国民のみなさんは、かなり応援してくれたと思っています。

それともう一つは、九州に菊池市という私と全く同じ名字の市があるのですが、その市の皆さんも、市長以下、本当に多くの方々に応援していただきました。今まで一切交流もなにもなかったのですが、ソチオリンピックをご縁に、交流が芽生えてくるかなと思います。

（質）ソチオリンピック以前の、小中学生・高校生の時に、誰か支援や、つながりがあった方はいらっしゃいますか？

（菊）小中学校の時につながりのあった方といえば、当時の学校の担任の先生方でしょうか。例えば、中学校の大会や全国大会などに出た際には、小学校の時の担任の先生や当時校長先生をやっていた方々からお手紙を頂いたりしたようです。

やはり全国レベルの大会に出ないと、なかなか人目につきません。だから信濃毎日新聞さんで取り上げてもらうと、長野県内に住む多くの方が見ているので知っている方もいらっしゃるかもしれません。

（質）地域の皆さんとの交流や菊池市の方との交流、学校の先生方とのつながりとおっしゃっていましたが、他のスケート選手もしくはスケート以外の選手と“家族ぐるみでの交流”は何かありましたでしょうか？

（菊）家族ぐるみの付き合いとか、そんなに親しい付き合いは無いです。ですが、中学校・高校レベルの部活動になってくると、父兄の皆さんも一緒になって応援するのです。だからそういう意味では、子どもを通じて、親同士の交流はすごく広がりました。だから私自身も、私の妻も、知り合いがたくさんできました。特に全国大会あたりに行くと、親たちはリンクサイドで応援するわけです。そうすると、「どちらからいらしたのですか？」「誰の応援ですか？」というような親同士の会話が必ずあるわけです。そこから交流が始まります。だから大袈裟に言うと全国の皆さんとも知り合いになりました。しかし、全国と言ってもスケートは暖かいところにはありませんから、北海道、東北などの皆さんとのお付き合いはあります。あとショートトラックの大会は日本全国でやっていて、いまでは北は北海道から南は福岡まであります。広島あたりの大会には応援に行ったりするのですが、そういうところで親同士の会話ができたりします。だからそういうところで親としても輪が広がっていきます。それは本当に子どものおかげだと思います。当然子供たちは同じ選手ですから、交流はすごくあると思います。

（質）親同士とのつながり、選手同士とのつながりとおっしゃっていましたが、それが直接でも間接でも、娘さん方への教育に何か関係した事はありませんか？

（菊）私はあまりないです。私は、わが子への教育に対しては一貫してあまりぐらぐら揺らぎません。先ほども言ったように、小さいうちに教育さえすれば、後はもう子ども達の判断で“自由に”というようにしています。たとえば大学生だとか高校生になって失敗をした時には、本人が「これは親に相談しなきゃいけないことなのかな」「これは自分たちで解決することなのかな」と判断して動けるところまで教育したつもりですから、その点で関係したことはあまりないです。

（質）ソチオリンピックに彩花さん萌水さんが出場されたとき、会場でのお二人はどのような様子でしたか？

（菊）エムウェーブの大会は、日本の観客は閑散としていたと思います。けれど、オリンピック競技は本当に観客がたくさんいます。その条件でスケートを滑るのはかなり緊張したと思います。

よく、「オリンピックという大会には魔物が住んでいる」と言います。どんなに日本で素晴らしい成績をあげて世界に通用する選手だとしても、なかなかその成果が現れない。魔物というのはそのことをいっているのではないかと思います。我々も高い席から見ていて、本人の顔が見えているわけではないですから、なんとも言えないのですが、彩花も萌水も初めての経験でかなり緊張していたのではないかなと思います。萌水の場合は、サブで行ったので、滑る選手じゃなかったのです。だから結局滑れずに、行くだけで帰ってきました。彼女の場合には、リンクサイドから日本の選手の滑りを見たり、海外の選手の滑りを見たりして、彼女自信も「4年後に、私はここで滑るのだ」という思いを強くして帰ってきたのではないかなと思います。

（質）ソチオリンピックのあと、帰ってきた娘さん方に、なにか変わられたことなどありましたか？

（菊）変わってないのではないのでしょうか。というのも、まだ子供たちは現役を続けているので。闘争心が強くなったかもしれないが、この段階にいても、さらに上を目指そうとしているから、人間が1回りも2回りも大きくなったということはないと思います。

少し話がそれるのですが、人間が大きくなったと感じるのは、南相木小学校の6年生を見た時です。

南相木小学校の6年生はオーストラリアへ1週間研修に行き、1人でホームステイをするのです。日本語しか話せない子供達が、カタコトの英語で、ホームステイ先の家族の皆さんと会話をするのです。1週間行ってくると、子供たちはとても大きくなっています。何が大きくなって帰ってくるかというと、自分というものを、はっきりと言えるようになって帰ってくるのです。それだけ「日本語を喋っているのは自分ひとりしかいない。だけど、こんな異国の地で何とかしなければならない」という気持ちが子供心にあらわれると思うのです。

5日間ホームステイするので、人間的にかなり強くなります。大人の感覚で言うと、向こうのお父さんお母さん達も親切に面倒見てくださるので、あまり心配はないと思うのです。ですが子供達にしてみると、まだ中学校に上がる前で英語の勉強などもしていませんし、日本の家とは違うし、本当に心臓バクバクだと思うのです。本当に緊張した5日間だったろうなと思います。

だけど、帰ってきた子供たちに「おかえり」と言うと、本当に1回も2回も大きくなって…。

少し話が逸れるけれど、今、子供達には村長のところへ報告に来てもらい、全員に一言ずつ感想などを述べてもらっています。すると「普段おとなしいこの子がこんなに話せるの!？」というぐらい変わってきます。それを見ると、かなり人間的には成長して帰ってきているなと思います。是非みなさんも、結婚したら南相木に住んでいただいて…（笑）。

（質）娘さん方へのメッセージをお願いします。

（菊）3番目・4番目・5番目の私の子供達がショートトラックでワールドカップに選ばれて、（2014年）11月2日からアメリカ、カナダ、中国へ大会に行きます。そして、11月25日・26日の大会では、2番目の彩花がワールドカップに選ばれて、彼女もまた海外へ行くことになりました。そのように、4人が海外行きに選ばれました。日本の代表で行くのですから、それらの大会でも胸を張って一生懸命頑張ってもらいたいと思います。

彼女たちの目標というのはおそらく、4年後のオリンピックだと思います。ですので、オリンピックを目指して、ケガのないように、続けるということは大事なことです。ということ、メッセージとして本人たちに言っておきたいと思います。

**（質）ここからは村長としての菊池さんへいくつか質問をさせて頂きたいと思います。
なぜ、村長という役職についたのかをお話していただけますか？**

（菊）私は当時56歳だったと思います。自分が若いうちでないと行動ができない。だから私がまだ若いうちに一生懸命頑張って、この人口1000人の小さな村を出来る限り元気になる村にしたいなという思いで立候補させてもらい、村民の投票で当選させてもらったのです。選挙とは、地域住民の皆さんに「しっかり頼むよ」と期待をしていただいてなれる仕事です。選ばれたからには、当然一生懸命やらなくてははいけない。それと同時に、自分の思いというの貫き通さなくてははいけません。

ただ、大人になってからのこういう仕事というのは、部下の皆さんが一番のトップと一緒に仕事をしてくれないと物事はうまく進んでいきませんし、ひいては、地域住民に歓迎されていかない。行政というのは地域住民に歓迎されて、なんぼの世界なのです。だから、どういうことが問題になっているのか、どういうことが良いことなのか、または、私が村長になって何をしたら「こういうことがよくなったよ」と言われるのか。そういう情報を常にもらえるように、出来る限り村民の皆さんとコミュニケーションを取るように心がけて、一生懸命やっているつもりです。

（質）南相木村の紹介と全国に伝えたいおすすめの情報をお願いいたします。

（菊）南相木村は、長野県の東南端に位置しており、村の総面積が66.03km²という本当に小さなところなんです。そのうち92%が山、森林です。いわゆる宅地といわれているところは、0.4%しかありません。その中で1000人の皆さんが生活をしているのです。紹介して欲しいと言われても、観光地ではないので、これはというところはないです。

ただ、自慢といいますか、南相木の村民の皆さんは、本当に心優しくて人情味の厚い方ばかりなので、

本当に住んでいて良いところだなと思います。

また、本当に四季がはっきりしているので、春のよさ、夏のよさ、秋のよさ、冬の厳しさがそれぞれ味わえるのもいいところだと思います。今は温暖化になって来ていますし、日本全国には、なかなか四季の良さや厳しさが経験できないという人たちも必ず数万人はいるのです。その数万人の皆さんだけでも構いませんので、是非一度、自然を楽しみに、南相木村にもお立ち寄り頂ければなと思っています。

南相木村の最上流部に、『ロックフィルダム』という岩を積み上げて堤防にした大きなダムがあります。堤防の幅が 444m あり、白いロックフィルの石を積み上げているため、堤防は真っ白です。その白い堤防に山の緑が映え、本当に素晴らしい風景です。自然がその中に生きているのです。先ほどお渡しした名刺の裏面にその写真があると思うのですが…。(名刺を見る) これは冬の南相木ダムの景色の写真です。

(もう一枚名刺を出す) これが、春から夏にかけての景色です。その写真には堰堤が写っているのかな。白いでしょう。すごく大きいダムなので、行くと感動します。また都会からいらして「えー! こんな素晴らしいところもあるのー」と言って感動して下さる方もいます。なので、皆さんにはどんどん来てもらいたいと思っています。辰野町も、南相木村を少しグーッと広げた感じの地域だと思います。南相木村は本当に自然しかないですが、その自然を楽しみに来ていただきたいです。

今、特産品を作ってみようということで、いろいろな研究をしています。南相木には鹿がたくさんいます。その鹿をただ駆除するだけではなく、せっかく獲った自然の産物…いわゆるジビエをどう活かしていくのか研究しています。

また、役場から上に行くと、立岩湖^{たていわこ}という、昭和 40 年に作った人造のダムがあります。そこに、県の水産試験場が開発した『シナノユキマス』という魚を放流して、釣りのメッカにしようという努力もしています。役場の自動ドアのところに『釣りキチ三平』という漫画の原作者の矢口高雄先生にイラストと題字を書いていただいたポスターがあります。11 月 29 日に立岩湖の表示看板も設置するのですが、矢口先生をお招きして、看板の除幕式をやろうという計画もしています。矢口先生は本当に世界的にも有名な方ですので、南相木村の PR のために協力していただけるのは、大変ありがたいなと思っています。

(質) 南相木村の運動環境や教育環境及び教育方針について教えて頂きたいのですが、南相木村の小学校では、スケートをやっているのでしょうか？

(菊) 南相木には小学校が一枚しかなく、中学校は隣町の組合立小海^{くみあいりつこうみ}中学校というところへ行っています。長野県はどうしても中学生の生徒数が少なく、南相木小学校でいきますと、全校でだいたい 30 人から 40 人の間ぐらいです。やはりそれでは学校として成り立たないので、小海町(長野県佐久郡)にお世話になっているのです。南相木小学校は今、各学年、平均だいたい 10 人ぐらいで、全校児童は 67 人しかいません。

その少ない児童数の中で、スケートをやっているのですかという話なのですが、スケートもやっています。南相木小学校の今年のスケートクラブ員は 21 名です。南相木小学校に関わっていただいている先生方が本当に一生懸命で、寒い中にも関わらず、先生方に直接ご指導頂いています。ですがそれは、強い選手をつくるためにという考え方ではありません。寒い中でスポーツをやることで、「やはりこの南相木村の冬は寒いよ」という経験をしてもらいたいのです。時には足が痛かったり、鼻水を垂らしたりということはあります。ですが、その体験が大人になった時に「あの時はヤダったよねー」「大変だったよねー」という会話の種になってくれればいいかなと思います。当然大会にも出ます。

大きな市部に行くと陸上大会、サッカー大会、少年野球大会など、スケート大会以外にも色んな大会があると思うのです。小さい村なので、そのような大会は南相木村では開催不可能です。その分子供たちは、松本の運動公園などで開催されている陸上大会などへもできるかぎり参加し、自分を磨いていると思います。成績は悪いですが、成績にこだわるのではなく、そういう経験を自分で体験をしてくることが大事だと私は思っています。だから子供たちには、そういう体験をできるだけたくさんしていただいて大人になってもらいたいと思っています。

役場の玄関を出て左側に^{そんみんけんしょう}村民憲章【※p.13に本文の引用あり】の石碑があります。その村民憲章のテーマが南相木村の教育方針なのです。教育目標で五本の柱を作り、学校や教育委員会などに「目標を達成するためには具体的にはどういうことをやっていけばいいのか」という検討をしていただき、学校の事業や公民館の事業としてやってもらっているのです。

（質）次にスケート以外で運動環境として社会体育館や村民グラウンドがあるそうなのですが、そこになにかスポーツは行われていますか？

（菊）昼間は農作業があったり、お勤めだったりするのでなかなか利用できないですが、夜はお母さんたちがバレーボールやバトミントンを行うために社会体育館を利用してくださっています。あと、夏場は大学や高校のクラブ・サークルの皆さんに練習で使ってもらっています。

グラウンドを利用して、年に一回、村民運動会というのをやっています。全村民が参加するため、かなり盛大に楽しんでます。走るのは苦手という人もいます。苦手なのに頑張って走り、はあはあ言いながら帰ってきて「もう明日は私やりたくないわ」と思う。でも、終わったあとのすがすがしさや、地区ごとの懇親会でいろんな人とコミュニケーションを取りながらお酒を飲んだりジュースを飲んだりするのも楽しみの一つです。村民運動会以外にもグラウンドを利用できたらいいのですが、なかなか難しいです。村営グラウンドには照明がついていないので、夜間は利用できないのです。

その代わり小学校のグラウンドは夜間照明がついています。たまに照明が付いている時があるので、たぶんそちらのグラウンドでは何かやっているのではないかと思います。

もうひとつ、スポーツ施設の話をしてします。お年寄りのためのと言うと少し語弊があるかもしれませんが、南相木村ではゲートボールが盛んで、お年寄りの皆さんが熱いのです。今メンバーが120人位いると思います。村内には、室内ゲートボール場が6施設あります。その内の一つの施設には2コートあるので、7面ゲートボール場があることになります。毎日午後に2時間ほど、お年寄りの皆さんが健康を目指して、毎日午後に2時間ほどやっています。本当に素晴らしいと思います。

（質）それでは、最後ですが2020年に行われる東京オリンピックに向けてなにかメッセージをお願いいたします。

（菊）私の子供たちが活躍するのは冬季ですから、あまり夏の方は関係がないとは思いますが、ソチオリンピックに行っていた時に、東京都知事の舩添^{ふすぞえ}さんも私のすぐ前にいらっしゃいました。観客の盛り上がりを感じられて帰られたようです。私も少しお話させていただいたのですが、都知事自ら一生懸命になっていらっしゃるなと思いました。東京オリンピックの開催時期は、どうも8月ぐらいになるようです。今、若い小学生から中学生、高校生の皆さんが、6年後の東京オリンピックを目指して日々一生

懸命練習していると思うのです。そんな皆さんには、オリンピックに出場できるように体を大事にして、けがのないように頑張ってもらいたいと思います。

また、私たちは競技者や指導者の立場ではなく応援する側ですから、結果的にメダルになればいいかなと思います。クーベルタン伯爵[注1]が言われたとおり、結果はとにかく「参加することに意義がある」と思っています。とにかく選ばれてその雰囲気味わうだけでも全然違うと思います。本当に皆さんに頑張って貰いたいと思います。

（インタビュー一同に）みなさんも今からでも遅くないのでは？バレーやバスケット、野球やサッカー以外に個人種目もあるではないですか。例えばアーチェリーとか。そういう種目などでも、やればできるということがあると思います。ただ練習などいろんな面で厳しいところもあると思います。是非頑張ってもらいたいと思います。

南相木村 村民憲章

村民憲章

わたしたちは、雄大な^{みねお}峰雄の山ふところに育まれた美しい自然と素朴な人情の里、南相木の村民です。

わたしたちは、先人の知恵と願いを受け継ぎ、明るく豊かで住みよいふるさとづくりをめざして、村民としての誇りと責任をもってこの憲章を定めます。

- 一、清らかな大気と水、緑あふれる自然を大切にし、美しい村をつくれます。
- 一、伝統と教育を尊び、創造性に満ちた文化の村をつくれます。
- 一、働くことに誇りと喜びを持ち、豊かさと活力ある村をつくれます。
- 一、いつも思いやりと助け合いに努め、心ふれあう村をつくれます。
- 一、心とからだの健康に努め、笑顔あふれる明るい村をつくれます。

引用元：<http://www.areasaku.or.jp/gyosei/03town/gaiyou/11town/t07.html>

[注1] クーベルタン伯爵 近代オリンピックの提唱者。後に「近代オリンピックの父」と呼ばれるようになる。「オリンピックの理想は人間を作ること、つまり参加までの過程が大事であり、オリンピックに参加することは人と付き合うこと、すなわち世界平和の意味を含んでいる」という考えを持っていた。

引用元：<http://www.joc.or.jp/olympism/coubertin/>